

ことばの迷い道

「嘉玲」が帰ってきたよ

のばやし あつし
野林 厚志

民博 学術資源研究開発センター

何年か前から気になっているのが、台湾の車両番号である。台湾ではアルファベット三つと数字四つの組み合わせで車両番号がわりふられる。これらの「諧音」(いわゆる語呂合わせ)がじつに多様であり面白い。日本だと、かつてポケットベルなるものが使われ、例えば「4649」が「よろしく」(夜露死苦のような「ヤンキー語呂」もあったが)ということばを表現したのと同じようなものと考えてよい。ただし台湾は多言語社会であり、語呂合わせの音が複雑である。

台湾は一七世紀の後半から対岸の福建省や広東省からの漢族系移民が増加した。福建省からの移民のことは閩南語と総称され、これが現在の台湾住人の大半が母語とする狭義の台湾語(台語)の基礎となっている。広東省からの移民は客家とよばれ、独自の客家語を母語にもつ。漢族系の人よりも先住してきたオーストロネシア系の原住民族は、各民族集団特有のことばを話してきた。第一次世界大戦後に台湾で政権をとった国民党は、北京官話を基本とする普通語(國語)を公用語とし、日本統治時代(一八九五―一九四五年)には日本語が台湾に普及した。こうした、「ちゃんぽん」な言語状況のなかでの「諧音」はこちらの予想をはるかにこえる。とはいえず、基本となるのは「國語」と「台語」である。

最初に車両番号の語呂合わせを知ったのは、台南でシラヤ族の段さんや国立台湾歴史博物館の謝副館長(当時)と食事に行ったときであった。レストランに派手なスポーツカーが並び、若者たちがたむろっているのを見て、車両番号が「0857」じゃないのと話していたので、どっという意味かをたずねると、「0857」は「您爸有錢」(あなたのお父さんはお

金持ち)の「台語」発音の諧音で、ちよつと裕福な連中が車両ナンバーに使うことがあると言つ。面白くなつてしまい、行き交う車のナンバーの諧音をしつこく聞くものだから、わたしが助手席に座ると、運転してくれる人が番号に気をとられて道を間違つてしまうこともある。

じつにさまざまな語呂合わせがある。例えば、上二桁の「52」は「我愛」なので、下二桁で相手の名前をあらわすと、とても甘いナンバーになる。別れてしまうとプレートを変えないといけなくなりそうだが、そんなときは車両ごと乗り換えてしまつてよ、というのはいかにも合理的な弁であった。「5438」は「我是三八」であり、女性は避けたい番号である。「三八」は諸説あるのだが、うるさい女性をあらわす台湾の古いことばだそうである。数字だけではなく、アルファベットも奥深い。DPP(民進黨)、KMT(國民黨)といった政治もの、FJCやASSといった避けたいスラングなど、なかなか気を遣うようである。運輸支局にあたる部署は、よくない意味にとれる車両番号は発行しないようにしていると聞く。

こうした語呂合わせは最近の新型コロナウィルスの場面にもあらわれている。新型コロナウィルス感染者が出ていないのは、「加零」(+)と表現され、「加零」の音は、七〇年代から九〇年代にかけて台湾の女性によくつけられた名前の「嘉玲」と同じである。「嘉玲」が帰ってきたよ」とニュースで報道された日は、新型コロナウィルスの新規感染者がいなかったことがわかる。

民主化が軌道にのる一九九〇年代以前、台湾は表現の自由を著しく制限されてきた。そうした環境のなかで根づいてきた表現の巧みさが、街のちよつとした風景から見とれるのはじつに面白いのである。